

《基調講演 I》

モンスーン・アジア文化圏の中の東北アジアの位置

安部 清哉 ABE Seiya (学習院大学文学部)

HP—<http://page.freett.com/abeseiya/> seiya.abe@gakushuin.ac.jp

【要旨】

アジア・環太平洋の連続する広い領域に、Monsoon Asia という気候を背景にした文化的共有現象が認められる。その領域には、文化人類学的共通性のほか、言語においても、共通する現象や、同語源の蓋然性の高い単語の広域分布が認められる。

また、M. A. 領域の東アジア地域では、気候の寒冷・温暖の格差が南北の文化を2分する文化境界がある。その南北境界線は、日本列島の南北方言分布境界線（気候線）と、朝鮮半島の方言分布境界線、及び、中国の「秦嶺—淮河線 Qing-Ling=Huai-river=Line」を結ぶ、一続きの文化境界線を形成している。

Monsoon Asia Cultural Sphere の中において、この Monsoon Asia Central Climate Line 以北には、日本・韓国北朝鮮・中国それぞれの北半分が同じように含まれ、「東北アジア」的な共通の文化特徴をもつ領域と位置付けられる。また、いわゆる東（東北）アジア文化研究においては、国単位の相違の背後に隠れている文化特徴として、日本・韓国北朝鮮・中国の三国が共有しているこの「アジア北方文化」「アジア南方文化」という「東西横並びの共通文化特性」にも、注意を向けて研究していく必要がある。

21世紀のアジア文化研究は、この Monsoon Asia Cultural Sphere (MA文化圏) というアジア・環太平洋領域を視野に入れていく必要がある。

◎以下は朝鮮語（韓国語）・中国語・日本語の成立背景に関する現在の研究水準である。

◆MA文化圏に分布する古い共通言語現象が、これら3言語に共通する基層言語であった可能性がここに指摘できることになる。

◆朝鮮語（韓国語）には、非アルタイ語の基層言語があるという説がある（金 芳漢 1983 ソウル、1985 東京）。「原始韓半島語（基層—アルタイ語（上層）」説

「韓国語はアルタイ語系でありながらも、非アルタイ語である基層言語、すなわち原始韓半島語の影響を受けている蓋然性が高いのである。／原始韓半島語はある種の古アジア語と関連のある蓋然性が高い。」

◆中国語は、その声調 tone が後代の発生であるという説がある（Matisoff James A. 1973, 1998）。Matisoff は、シナ・チベット語は、当初、子音と母音が整然と配列された、tone も pitch もない単一音調の単音節言語であったが、それが後代に語頭または語末の子音の音韻対立の消滅の代償として声調の対立が生じたとする。

「In the beginning was the Sino-Tibetan monosyllable, arrayed in its full consonantal and vocalic splendor. And the syllable was without tone and devoid of pitch. And monotony was on the face of the mora.……」

◆日本語の系統は、世界的研究水準において現在も未詳であるが、崎山理 1990『日本語の形成』以降「重層説」で検討するのが日本では主流になった。諸説多いので学説は省略に従うが、小中高校生用教材にさえ紹介できる段階に入ったことを示す下記の解釈が、学会の有力な3説を「象徴」しているので、引用しておく。

①アルタイ語系説「(略) 日本語の系統が現段階では、明確になっていないからである。しかし、日本語とツングース系言語との系統関係を認めて、日本語をアルタイ語族に含める学説がある。」東京書籍 2001 改訂5版『図説世界史』

②北方語基層—南方語上層説「ユーラシア大陸内部に起源をもつ語に南方語や漢語が加わって日本語となった。」東京書籍 2002 改訂新版『図説日本史』

③南方語基層—北方語上層説「言葉のきまりは朝鮮・モンゴルなど大陸の北方とにしている。体の位置部を表す言葉の発音は南方の台湾・フィリピン・オセアニアと似たところがある。この南北の影響を受けて、日本語はつくられていったらいい。」小学館 1999『21世紀子ども百科歴史館』

0. はじめに

アジアの領域には、いくつかの共通した言語現象と、同語源の蓋然性が高い基礎語彙の分布が認められる。それは、特に河川名と類別詞に顕著である。その類別詞の世界的分布領域は、Monsoon Asia 気候（以下、MA気候）の領域、及び、Frobenius 1938 が指摘する東洋の類型的な神話分布の領域（全10枚）とほとんど重複している。それは、アジアから環太平洋に及んでいる。これらの分布の一致は、気候との関連性が濃厚であることから考えて、単なる偶然とは見なしにくい。MA気候という自然環境要因が、極めて長期に互って、植物・動物、食物栽培・動植物加工や動植物移動ほか、文化・言語、言語を媒介とする神話分布の形成に影響してきた結果と考えられる。

発表者、日本語の歴史を研究する過程で、日本語方言の歴史的解釈と河川名研究からこの文化領域の問題を指摘するに至った。ここでは次の4点について取り上げる。

①MA領域における河川名（ナイ・サワ・ヌマ3語）の分布状況

②MA領域の文化的共通現象とそれらのアジア・環太平洋の範囲（「MA文化圏」）

- ③東アジアを南北に2分する文化的境界線（「MA中央気候境界線」）
 ④MAにおける③の境界線以北が「東北アジア」的共通性を有すること
 （詳しくは、安部 2003. 7, 安部 2004. 12, ABE2003. 7 ほか, 参考文献に挙げた拙論参照。）

1. 河川名と類別詞の分布領域とモンスーン・アジア

アジアには、これまでも同語源の単語の広い分布が指摘されてきたが、古い言語分布を研究するためには、河川地形名を調査することが有効であることが指摘されてきている。（参照、W. B. Schostakowitsch 1926、H. Krahe 1954、安部清哉 2001. 8、安部 2003. 7）

アジアの河川名（水源地形名）の分布を、日本語のナイ（図1）、ナワ（図2）、ヌマ（図3）から調査していくと、東アジアだけでなく、東北アジア、南アジア、太平洋に、同源と推定可能な単語分布が確認できる。河川名の分布は、他の言語分布現象や気候区域との相関性が極めて高いことが指摘できる（安部 2001. 11）。そこで、特に同源性が高くかつ広い範囲で分布していたナイの分布領域と重複する気候区分と言語現象を探索したところ、モンスーン・アジア Monsoon Asia と呼ばれる気候領域、及び、類別詞（classifier）の分布とほぼ重複していることが見出された。これら河川名、類別詞、気候の分布領域が重なるということは、歴史的背景として、何らかの文化的共通性があることを示唆する。この領域の、より詳細な研究が必要であることを意味している。

2. モンスーン・アジアという文化領域（Asia & Pacific rim）

1で見たモンスーン・アジア気候の領域のうち、ユーラシア大陸側は、気候学において比較的明確な境界線が示されている。そこで、安部の日本語方言での研究方法と同様に、このMA領域に様に分布する文化現象、ないし、その領域の外側の世界とは性格を異にする文化現象を、文化人類学的現象全般に互って探索した。すると、以下の①から④のような、多くの特徴的現象を見出すことができた。

これらの分布のユーラシア大陸内部の境界線は、必ずしも完全に一致するものではない。特に東北アジアになると、その分布が見られなくなる現象も少なくない（◆注1）。しかし、大局的に見れば、MAに共通する特徴的文化的現象、あるいは、MAの境界を特徴付けている現象と見なすことができる。（◆注1、東北部は、気候の関係で現象が希薄になり、Cline 地理的漸移勾配をなすと解釈される。）

《モンスーン・アジア文化圏の文化人類学的諸特徴》（分布図は安部HP参照）

① Distribution of Classifiers by Aikhenvald 2000, [「類別詞」の分布領域]

世界的に一定の偏りをもつ理由は Aikhenvald では説明されていない。図は太平洋中心に原図を改編してある。

② Monsoon Asia Area by Yoshino, Masatoshi 1999, [気候区域モンスーン・アジア気候区]

研究によってその大陸側の境界線の位置が多少異なる。この気候の範囲が植物・動物の分布に影響している。

③ Region of the precipitation over 100mm (in July) in Asia & Pacific rim

[アジア・環太平洋における夏季（7月）の降水量100ミリ以上の領域]

夏でも人類に必要な一定以上の水が得られることを意味する。この領域の外側はより乾燥した地域である。

④ Distribution of Chopping Tools in Paleolithic era by R. Lewin 2002,

[旧石器時代のChopping Tools（打製石核石器）の分布領域]

考古学で、打製石器はインドから東方になると西側と相違することが知られている。そのインド西方の境界は「MOBIUS LINE」と呼ばれるが、MAの境界と一致していることが、安部の研究で初めて指摘された。植物・動物の変化に合わせて、それらを加工する道具が変化したものと推定できる。

⑤ Distribution of Dioscorea (yam) by Nakao, Sasuke 1966.

[ヤムイモ（温帯種・熱帯種）の分布領域]

⑥ Distribution of Taro by Hotta, Minoru 1974. [サトイモ科の分布領域]

⑤⑥は MA 地域に共通して分布する特定の芋類である。芋は主食となり、その地域の人間の生活や文化・習慣に食物文化として等質的共通性を形成するという点で極めて重要な要素となる。芋はハイヌヴェレ（死体化生型）神話の形成と密接に関わり、Frobenius の東洋型神話（⑭参照）「7死体からの作物発生」の範囲と重なる。MA 気候とこれらの芋類とフロベニウスの神話分布図の3つの地理的重なりを具体的に示したのもおそらく世界最初か。

- ⑦ Distribution of liquor fermented by aspergillus & by saliva by Nakao, Sasuke 1967.
[酒類分類における麹発酵酒+唾液発酵酒の分布領域] 大陸側にも唾液発酵の地域がある。
- ⑧ Historical Distribution of the Tiger by IUCN 1996, [トラの本来的生息地域領域]
MA 地帯以外にも分布は見られるが、基本的に森林・草原地帯で活動した動物であることがわかる。
- ⑨ Floral zone in Asia by Kitamura, Shiro 1957 [アジアの植物区系]
MA の内部は複雑に分れるが、その外側の乾燥地帯との間にははっきりした境界線がある。気候と植物分布が密接に関係していることがわかる。
- ⑩ Area & Division of Farming in China by F. Spencer 1954, [中国の農耕領域]
内陸部における放牧や非農耕地域との間に境界線がある。MA の境界と一致している。
- ⑪ Urhaimat & Diffusion Area of Austronesian by Katayama, Kazumichi 1996,
[オーストロネシア語 AN の源郷と拡散地域]
AN の源郷は台湾とその大陸側対岸の東南アジア沿岸が定説。AN の話者が海洋に出て、MA が及び海水温・海流が等質的である(③④参照) 太平洋・インド洋に拡大したことがわかる。AN の分布領域は、MA の気候・海流の及ぶ範囲に従って拡散した結果、現在の領域を獲得したと解釈できるが、この一致の指摘も安部が初めてか？。
- ⑫ Distribution of mice (Castaneus & its Hbb-d type) by Moriwaki & Yonekawa 1993,
[ハツカネズミ (キャストネウス型および Hbb-d 型) の世界的分布領域]
キャストネウス型及びその一種とも考えられている Hbb-d 型が MA の範囲に分布し、それ以外の分布とは明確に分かれる。MA 気候に順応した種類と解釈できるか。
- ⑬ Distribution of Typological Mythology of East by Frobenius 1938,
[東洋における神話の類型的分布領域 全 10 図 (フロベニウス 1938)]
東洋に典型的に見られる神話類型 10 枚の内の 2 枚。フロベニウスは、世界神話は西洋型と東洋型という典型的東西分布を指摘する。東洋型の分布範囲は、類別詞や MA と極めてよく一致する。気候と文化が共通した範囲に同質の神話が伝播したと推定する。10 の類型は「1 英雄が母の死後生まれる」「2 矢の梯子」「3 柱の悪戯小僧」「4 海の怪物に呑み込まれた英雄」「5 太陽の子」「6 花からの誕生」「7 死体からの作物発生」「8 木彫りからの魚(及び鯛)の発生」「9 釣られた少女」「10 焼石」。
- ⑭ Distribution of Money Cowrie (shellfish, Family Cypraeidae) by Shirai, Shohei 1997, [MA 海域におけるタカラガイ類の分布領域]
他の多くのタカラ貝類は、この貝の分布範囲の内側に分布する。この海域において海水温度や海流に一定の均質性があることを示す。MA の気温と風向が関係していると考えられる。

これらのうち、その領域が比較的明確でかつ広域に互っている、類別詞、MA 気候、そして神話分布は、ほとんどその範囲が重なっている。それらは、アジアから環太平洋に及んでいることがわかるこれらの多くの分布範囲がほぼ重複しているのは偶然とは見なし難く、相互に何らかの影響関係があったものと推定される。

これらの現象の中で、植物・動物ほか、多くの現象に影響を及ぼし得るのは「気候」と考えられる。それゆえ、これらの共通現象を極めて長期間に互って形成してきたのは、モンスーン気候という自然環境にその第 1 要因があると結論付けられる。世界的に見ても、このように多くの文化的特性が重なり合う広域の領域は、ほかに見出せない。

よって、これらの文化的共通性に着目し、この領域を仮に「モンスーン・アジア文化圏」と名付けることにしたい。

2. モンスーン・アジアを区画する「M. A. 中央気候線 Central Climate line」 (中国の「秦嶺-淮河線 Qing-Ling Huai River line」の延長線)

MA の中でも、東アジアの日本列島・朝鮮(韓)半島・中国大陸には、気候の境界線がある。また、気候の境界の影響で、文化的現象においても、分布の境界が見られる。(安部 1999. 9 以降参照。図 A B C D 参照)

その境界線は、中国では既に漢の時代から文化境界として知られており、「秦嶺-淮河線」という名称を持つ。中国の歴代国家形成にも影響してきたことが知られている。安部 2003. 3 では、その境界線も含め、中国大陸・日本列島・朝鮮半島の文化の境界線を一続きの共通の背景をもつものとして、初めて把握した(「モンスーン・アジア中央気候線」と名付けた)。

その境界線は、旧石器時代の「細石刃文化」の拡散ルートにも認められる(図 A)。それゆえ、MA 気候の

範囲の中にあっても、古くから文化にも影響を及ぼした境界線であったことが分かる。今後は、MA文化圏形成過程における、この境界線の影響についても研究が必要と考える。

3. 「東北アジア」の領域——日本・韓国北朝鮮・中国に共通する北方・南方

MA文化圏における東アジアは、2で示した「中央気候線」(図A)によって、南北2つに区分できる。それは、日本・韓国北朝鮮・中国をほぼ南北に2分している。この中央気候線の南北で、東アジアの諸文化は大きく異なる。より寒冷型の文化特徴が濃厚になる「北方アジア地域」と、東南アジアとの文化的共通性が強く、より温暖型の文化特徴が濃厚な「南方アジア地域」である。

日本・韓国北朝鮮・中国という国家的相違の背後には、それぞれの北部・南部で共通するこの東西横並びの文化的共通性があり、その点にも目を向けていく必要がある。

仮に、文化的共通性の高い地域をくくるといふ観点から、「東北アジア」という言い方を使用するとするならば、このMA文化圏における中央気候線以北の地域を、ひとまとまりの「東北アジア文化圏」と呼ぶのがふさわしい、と言えようか。

4. 「モンsoon・アジア」文化圏研究とモンゴロイド文化史の研究

上記のMA文化圏の領域は、人類学的に見ると、モンゴロイドが、インド西方からアジア・太平洋周辺に拡散していったルート・範囲とはほぼ重なっていることがわかる。

今後、21世紀の研究として、人類学的研究としても、文化学・文化人類学研究としても、また、言語学としても、このMA文化圏におけるあらゆる歴史的研究が必要と考える。

MA文化圏のような、特殊な領域の指摘は、世界的にもまだまったく新しいものであり、今後批判的検討が必要であることはもちろんである。ただ、人類学的に見ても、極めて貴重な研究対象であり、危機言語の調査などの貴重な研究データ収集を急ぐことを含め、今度、この領域を対象とした「モンsoon・アジア文化学会」のような国際的学際的研究学会組織が、必要になってくると思われる。

◆ [参考文献] (抄録。関連文献や地図は拙論や <http://page.freett.com/abeseiya/>参照)

Hans Krahe(1954)『SPRACHE UND VORZEIT』

W. B. Schostakowitsch (1926)「Die historisch-ethnographische Bedeutung der Benennungen sibirischer Flüsse」, UJ6-1・2(Ugarische Jahrbücher) (表紙印刷数字は1927)

鏡味明克 (1977)「地名の起源」『岩波講座日本語 12』岩波書店

鏡味完二 (1958)『日本地名学』東洋書林原書房

鈴木秀夫 (1987)「民族の移動と言語の分布」『言語』16-7 と氏の先行論文

宋 敏 (1999)『韓国語と日本語のあいだ』草風館

都 守熙 (1977)『百濟語研究』亜細亜文化社

朴 炳采 (1968)「古代三国の地名語彙攷 (副題略)」『白山学報』5

李 基文 (1975)『韓国語の歴史』大修館書店

李 芳漢 (1983)『韓国語の系統』三一書房

ABE, Seiya(2003. 7. 29)Dialectical/climatic features and distribution of terms for watercourses in Asian languages : the case of Japanese, Korean, and Chinese,

‘Papers of XV II International Congress of Linguists’ in CD-ROM, Prague, CIL, 2003,

あべせいや (1997)『日本語のルーツを探ったら』アリス館

あべせいや (2004. 12)「言語地理学と日本語とアジア・環太平洋言語史」『日本語学』23-15

安部清哉 (2001. 8)「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」『韓国日本學會 (KAJA) 第63回學術大會 Proceedings』

安部清哉 (2001. 11)「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関 配布地図・補論」『玉藻』37

安部清哉 (2002. 5)「方言地理学から見た日本語の成立——第3の言語史モデル理論としての“Stratification Model”——」『方言地理学の課題』明治書院

安部清哉編 (2003. 3)『日本語の方言分布境界線 (関越線・気候線) による方言の重層性に関する基礎的研究』平成13・14年度科学研究費成果報告書、私家版

安部清哉(2003.7)「関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景」『国語学』54-3
安部清哉(2004.7)「地名と日本語――河川地形名の言語空間」『国文学解釈と鑑賞』69-7
安部清哉(2005.5)「日本語・朝鮮語の境界とモンスーン・アジア文化圏――水源地地形名 numa<*nub(沼・泥)の「b-m」音韻対応――」大韓日語日文学会『日語日文学』26号

◆【付記】本稿は、平成15-17年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「言語成層論モデルによる日本語とモンスーン・アジア地域の言語史に関する基礎的研究」(課題番号15520298、代表者：安部)による研究成果の一部でもある。